

「三従の桎梏」を詩の「昂ぶり」に変える人

石下典子第二詩集『神の指紋』

初めて「石下」という苗字を「いしおろし」と読める人は、少ないのではないか。「いしした」か「いしげ」と私も読んでしまった。しかし栃木県内では、石下城や石下という地名もあり、「いしおろし」という苗字は少なくないらしい。二〇〇六年初め頃だったろうか、山本十四尾さんの詩の教室で石下典子さんを紹介された。前もって山本さんから石下さんが詩の教室に通うようになって、エネルギーに溢れた独特な文体で、堰を切ったように詩を書き上げていることを知らされていた。その詩篇群も郵送されてまとめて読んでいた。控え目なタイプの印象だが、本格的に詩作を再開した決意を胸に秘め、未知の表現に挑んでいく情熱のほとばしりを瞳の奥から感じたのだった。石（意志）を堅固に抱えて、その背負ってきた自己課題を決して下ろし（降ろし）はしない強さを受け取ったのだ。

山本さんから送られていた十数篇を読んで、「COALS A C K」で特集を組みたいと思った。そして私は十篇を選び「神の指紋」というタイトルをつけて五四号で小詩集を編集したのだった。その十篇を「一章（神の指紋） 摘む、神の指紋

夕飯を食べている

浅く掛けた椅子の猫背に

無言の箸が往復している

少年の「見えないもの」である心を探す母の心情から詩は始まる。学校・家庭という小さな世界の中でも少年は難破船のように彷徨い、「こころ死んだ少年の亡霊」となって「夕食を食べている」。傷ついた少年の心と母には、言葉は宙を舞い、心通わすものは、無くなっている。「無言の箸が往復している」いたたまれない時間だけが過ぎて行つたのだ。石下さんにとって、「見えない」少年の心をどう分かってあげたらいいのか。石下さんは、言葉の無力さを痛いほど感じていることから困難な詩作に挑んでいったのだ。

母を悔悟の総てがしめあげた

荒れ狂う暴風の中で吹き飛ばされぬよう

母ひと文字を杭にして

しかし切なく遣りきれないのは

誰でもない

十五のおまえだった

おまえの母はこの母ひとり

どこまで墮ちてもさらにその下

水を汲みに、省く、南洋桜、二章（潦わたすみひかる） 覗み、潦ひかる、蘭ラン、尼、蜘蛛の巣情意」の二章に分けた。今回の新詩集のタイトルも期せずして『神の指紋』（三十一篇）となった。五四号の十篇の中からも八篇が収録されている。なぜ「神の指紋」をタイトルとしたいと考えたのか。その詩題が読む側に様々な問いを発してくるからなのだ。なぜ「神」に指紋があるのか、その「神」とは誰なのか、「指紋」とは何を示しているのか、石下さんにとって「神の指紋」とは何であるのか。次々とそんな問いと想像力を刺激してくる詩句は滅多にないからだった。そして石下さんの指先の指紋の曲線から波動してくる震えのようなもの、その人間固有の生きる叫びのようなものを書かざるを得ない、底知れぬ情熱を「神の指紋」というタイトルに感じたからだと思う。そのような意味で石下さんにとって詩を書くことは、手慰みではなく、運命を見出す羅針盤を自分で組み立てて、それを見つめる行為であったろう。「神の指紋」の詩行の冒頭を抜き出してみる。

かたちあるものなら

はじめから

失う覚悟もできる

見えないものはどう守ればよかったのか

こころ死んだ少年の亡霊が

この手で受けてやる

呪文のように呟けば

うしろ指さされる痛み 誇りの棘なんかどうにでもなる

しかし言葉の無力を抱えながらも、石下さんは自らを「母ひと文字」の言葉と化し、少年を支える杭のような存在になるうとし、「母ひと文字」の存在は、「十五のおまえ」が「どこまで墮ちてもさらにその下／この手で受けてやる」と覚悟を決める。子供が地獄に墮ちて行こうとする瞬間に、身を挺して受けとめる母の無意識の手の動きこそが、「神」の動作であり、自らが「神の指紋」を意識した瞬間だったのではないか。「誇りの棘」とは、不良と言われた子を庇う母の盲目の愛という非難にさらされたことの痛みだったろうか。それでも無意識に子を庇う母という存在を杭の言葉として書き記し、ともに地獄に寄り添って墮ちていってもいいと腹を括っていたのだろう。

幼さを隠せないひよろりとした腕の

真ん中の崩れたくぼみ

それは 自らが煙草の火を押し当て

根性焼きと呼ぶ火傷である

生涯の落款 親と子の

だがともかくも気が済んだのだ これだけ

でなければ

自裁の決着をつけていたかもしれぬ

母にはわかる

ひしと腕を握り この世にとどめてくれた

神の指紋

そんな地獄のような子育ての時期を過ぎて、息子の腕の火傷である「根性焼き」をいま、石下さんは、大切な心の奥底の聖域にある「神の指紋」として眺め、また心の指先で触れているのではないか。親と子が覗いてしまった「自裁の決着」の代わりに「神の指紋」が子の腕に刻印されたのだ。「神の指紋」は石下さんにとって書かざるを得ない作品であつたらうが、次に引用する「桜の入水」もまた「神の指紋」の課題をその後も生きようとしている詩であると思われる。

己の文体で生きてみたい

明喩を捨て

想いのまま解放された詩句で

女は飴状に貼りつく誹りを解き

出離した足で境内の桜の根方に立った

踏み入った肋を臍はらから見上げると

枝垂れの花房は女を刺しながら落ちてくる

心地よい花の痛みが創をさすってくる

わたしら女は目を落とすまで

子の末を案ずる錘おもりを埋めこんでいる

足枷でなく 荷でなく

哀しいばかりの生きる張り合い

最期に極ごと焼け崩れても

ふたつの願いはせめぎあい

あさましい焰は混じり合わない

日没の小半どきだけ見える

ラピス色の虚空に

ほの白い花は闇を動かし

百年の告白 幾百の多情を

他言なく聞き継いでいる

宵闇の湖面にはなれた花筵を仰ぎ

女はひと思いに入水する

かるがると腐心を剥いで

枝垂れの丸天井が女の溺死体をすっぱり包み込む

(「桜の入水」全行)

初めの一行「己の文体で生きてみたい」が、石下さんの詩

思想を雄弁に語っている。娘であり妻であり母である女達は、故郷に生まれると、父・夫・子の「三従の桎梏」に生涯したが、「一族の女達は物言わぬまま土になった」(詩「線香花火の夜」より)という。石下さんはそんな女達の「無言の言葉」を汲み上げようとしている。「飴状に貼りつく誹りを解き」

ながら、桜の花びらを心地よい痛みのように受け止めている。「子を案ずる錘り」で入水場所を探していた女は、降り注ぐ桜の花びらが、「自裁の決着」を断念させてくれ、代わりに桜が

「女の溺死体」の身代わりになって散っているのだと思えてきたのだろう。「三従の桎梏」にとらわれて生きる「下野の女」達の「沈黙の言葉」が石下さんの言葉に乗り移ってくるように

に思われる。その意味で石下さんは故郷の女達の「哀しいばかりの生きる張り合い」や「百年の告白 幾百の多情を 他言なく聞き継いでいる」のだ。第一詩集『花の裸身』は十七年前の一九九一年に刊行された。その詩「花の裸身」の最後の四行は「夜明けのあおい窓で／花は花を脱ぎ捨てた。／見えない裸身に／沈黙の言葉が受粉する。」と書き記されている。石下さんは十七年の時間をかけて「沈黙の言葉」が受粉するのを様々な試練を経て、辛抱強く待ち続けてきたのだろう。

「十五のおまえ」の「見えない心」や「下野の女」たちの「沈黙の言葉」が「宵闇の湖面にはなれた花筵」に解き放たれていくのだ。

次に引用する「素足の女」は、今の石下さんが立ち向かっ

ている困難さを乗り越える自然の力や底知れぬ情熱を感じさせてくれる。

右を向けば那須風のビンタ

左からは男体の張り手

この集落に住む者は

吹きおろす刃の鎌鼬に会う

それは気づかぬうちに柔らかい胸まで切り刻み
塞がった傷の岬まねじりから熱い水がこぼれる

踏み締められた土の上で辛抱強く息を潜め

肺の中まで同化させた年月

土俗と因襲の土から

どよめくように見知らぬ領地を目指した女を

人は語り草にしても

誰も 間違いを生きているとは教えなかった

女は土塊を抛り投げ

弓なりの軌跡に訊ねる

見知らぬ地までの距離を

そこにあたたかな胸はなく

棘の森と凍りつく雪原が拡がっている

けれども凍土からあつく烈しい地ひびき

荒々しく目覚めさせる地底の銅鑼を

女は凍えるあなうらで初めて知る

それが滾る樹液のような力

女の随をかけあがっていく

〔素足の女〕(全行)

戦後六〇年以上が過ぎても民主主義や男女同権は、当たり前のように言われているがまだ実現されているわけではない。特に閉ざされた風土では、「三従の桎梏」や「謝」の語意を持たぬ一族の男系」「線香花火の夜」によって女たちは「土俗と因襲」に縛られている。初めの四行である「右を向けば那須風のビンタ／左からは男体の張り手／この集落に住む者は／吹きおろす刃の鎌鼬に会う」という凄まじいばかりの、故郷で生きることの苛酷な風圧を見事に表現している。石下さんが真の表現者でなければその風圧はさほど感じないで、生き得たかも知れないが、真に詩を志すものとして石下さんは、萩原朔太郎と同様に故郷の目に見えぬ「土俗と因襲」から疎外感や孤立感を抱いている。石下さんにとってその故郷のビンタのような風圧こそが、石下さんの他の詩人に見られない底知れぬエネルギーに溢れた文体を生み出したつあるのだ。「誰も 間違いを生きているとは教えなかった」と悟り、石下さんはさらに困難さを引き受けていく生き方によって、

新詩集は輝きを増しているように思える。私は石下さんが「三従の桎梏」から解き放たれて「滾る樹液のような力」を甦らせて、一人の人間となるうとする生き方に感動を覚える。そんな石下さんの詩を未だ「土俗と因襲」でしか生きられない、苛酷な環境に生きる人々にこそ読んで欲しいと願っている。最後に石下さんの今の心境に最も相応しい詩を引用する。母や祖母達から伝承されてきたことを問い返し、その根源的な意味を肉体を通して考え続けて、詩への「昂ぶり」に転化していく石下さんの試みは、まだ開始されたばかりなのだ。

芹

女は食べてはならない

明治の祖母は 伝承通りに

箸を制したものだ

〈芹は血を荒らす〉

の荒ぶ血の語感

初潮をみたばかりの少女に飛沫を散らした

畔にしがみつき大地を吸うひげ根

正視しがたいまでに絡みあい

みだらにもつれた足

スリットを割って

太腿あらわな足が男のながい足に纏わりつく

愛の数だけあるアルゼンチンタンゴの抱擁

を思いながらひたすら洗う

強靱な紫色の灰汁を絞り

晒した粗みじんの塩炒めを

湯気たちのぼる白飯に混ぜこむ芹こはん

夕凧のからだに

もはや箸を制する人もなく 存分に食す

未明の蒼い吹き溜まりで

ふいにあの人の腕の強さが甦る

もしや血を荒らすとは情を濃くすること

愛欲を避ける嗜みとして

語り継がれた知恵だったのではないか

芹のせいかもしれない この昂ぶりは